

## 第5章 言葉以前の概念

私の認識は、創造性を生み出す。

私ができると、自己の認識である外と、自己の関連全体の己以外を、同一視することになる。

そして私は、私の関連全体を創造する。世界の基礎ができる。

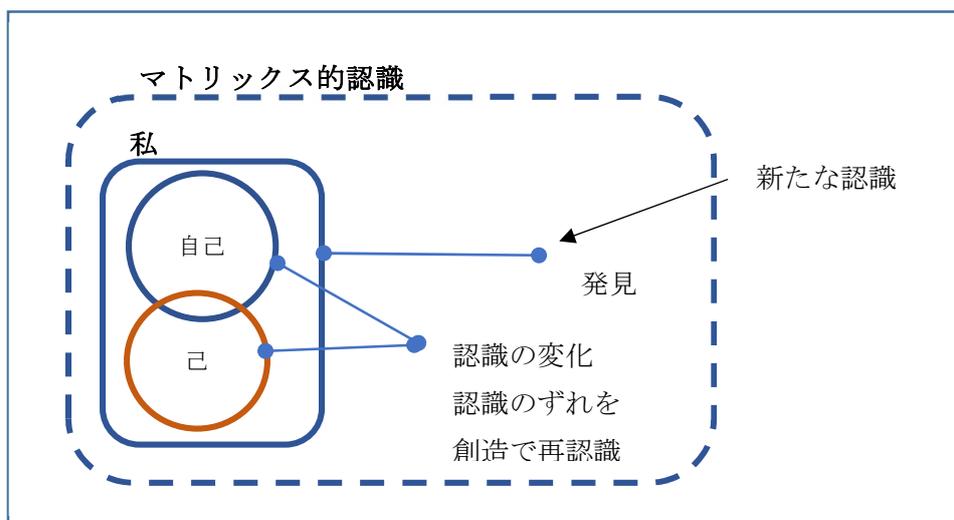
関連全体は、私から見た認識は一部にあたるので、当然外側が存在する。常に外側からは、新たに認識され、内側に入ってくる関係が現れる。

私、私の関連全体、新たな関係（外側からの来報）が、概念として認識されることになる。

この概念は、人の集団の中で、創造と発見の後押しを受けて、新たに共通化され、変容することとなる。

### 第5章1項 創造と発見のかたち

認識のマトリックス化ができるようになると、1つの対象に対する認識が複数化して、相互的な関連が作られる。この関連の認識を、瞬時にすべて把握できない。ある時、新たに認識することになる。



またその中で、一つの認識が変化して、ほかの認識も変化させて、対応しなければならない。しかし処理の不足のため、すべて変化できない、このため対象が、分離したり、他と結合したりする。新に認識することになる。

そして新たな認識の関連を生み出す。新たな認識とその関連である創造と発見が、広範囲にできることになる。創造性は、世界、神、言葉の基盤を相互間に接続して、世界の成立に、大きくかかわることになる。

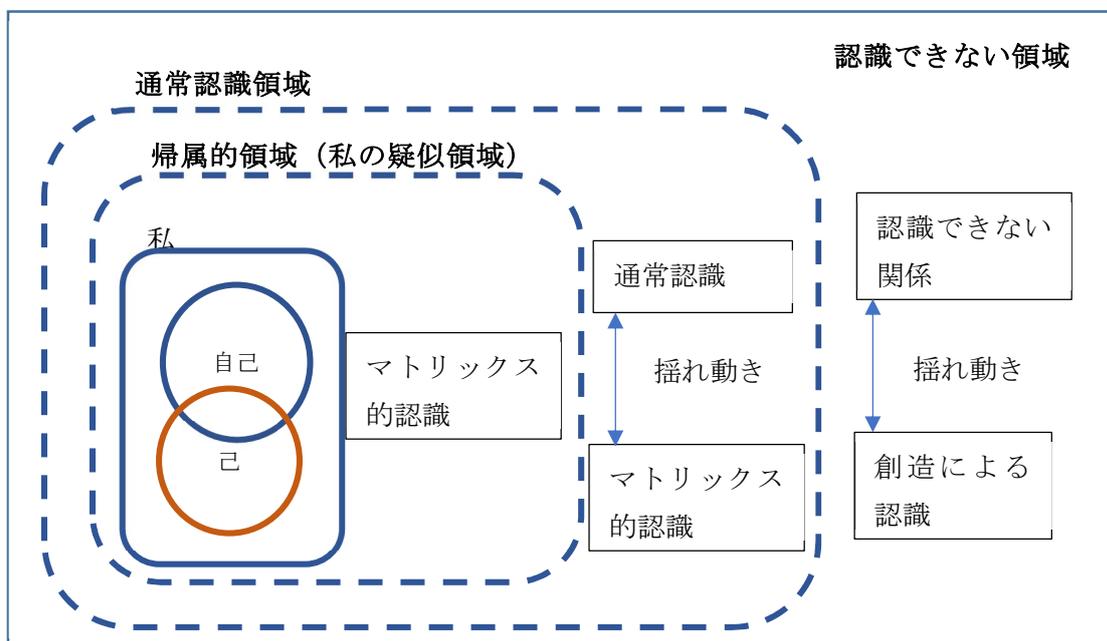
したがって創造は、私が認識する関連の中で、新たな認識の関連として生まれる。また発見は、新たな外かの、私が認識する関連との、新たな認識の関連になる。この創造と発見には、混沌がかかわっている可能性が、十分にあると思われる。

## 第5章2項 世界の基礎（世界認識以前）

自己の認識では、自己があり対象を認識する。認識は、自己を中心とした放射状になる。認識の強弱によって、自己との認識の強弱と認識の数が作用する。忘れることで、強い認識は数が多く、弱に認識は数が少ない。

また生物としての距離は、自己の周辺が、一番重要な認識になる。そのため、私における親密な距離は、必ずしも生物的距離に比例しない。

一番多く認識できる特定の親密関係が、一番自己と近くなる。生物の認識器官や脳の関係の親和性に従って、生物中心が最低で、生物の内と外の境界、認識が最大になる距離で最大になり、さらなる外側に行くにしたがって、少なくなる。



私という認識は、自己、己、帰属的領域の中の一部が、マトリックス的認識の中で私の疑似領域になる。そして脳の自己同一化できるかどうかで、通常領域が出来上がる。通常領域では、通常認識とマトリックス的認識の間を揺れ動くことになる。この形は世界の基本になるが、世界ではない。

そして認識できない領域は、関係がないため、創造性が働き創造による認識をするようになる。

現代の私たちは、言葉としての世界を知っているので、創造の力で世界として認識しようとするが、世界の成立には、内と外の境界を持った構造が必要になる。

構造は、人と人がかかわりによって、これから作られるので、この段階では、世界の基本になる。

この段階においては、まだ人は、世界を世界として認識できない。